

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	「フィレンツェの十六世紀 『マニエーラ・モデルナ』と対抗宗教改革」展
Author(s)	甲斐, 教行
Citation	五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要(25): (11)-(17)
Issue Date	2018-11-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/13647">http://hdl.handle.net/10109/13647</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

【展覧会評】

「フィレンツェの十六世紀——  
『マニエーラ・モデルナ』と  
対抗宗教改革」展

甲 斐 教 行

会期：2017年9月21日—2018年1月21日

会場：フィレンツェ、パラッツォ・ストロツィ

史上初となる本格的な「ブロンズイーノ展」(2010年)<sup>1</sup>、本誌でも紹介した「ポントルモとロツォ・フィオレンティーノ展」(2014年)に続き<sup>2</sup>、アントニオ・ナターリとカルロ・ファルチャーニ(図1、2)のコンビがパラッツォ・ストロツィを舞台に、彼らにとり三番目の展覧会となる、フィレンツェ16世紀美術展を監修した。評者は一般公開前日の報道者用オープニング・セレモニー(2017年9月20日)に出席し、展覧会を一瞥する機会に恵まれた。本誌上で展覧会の内容を概観してみたい。

本展は個別の美術家のモノグラフ的展覧会であった上記二例とは異なり、16世紀フィレンツェを彩った画家・彫刻家の作品を総花的に扱う点、特に従来等閑視されがちな同世紀後半の対抗宗教改革期美術に光を当てた点に特色がある。

ミケランジェロの《河神》(フィレンツェ、アカデミア・デル・ディセーニョ、カーサ・ブオナローティ寄託)とバンディネッリの初期作品《メルクリウス》(パリ、ルーヴル美術館)というフィレンツェ彫刻界を二分した巨匠、そしてフィレンツェ16世紀画派の始祖とも言うべきアンドレア・デル・サルトの《ルーコのピエタ》(フィレンツェ、パラティーナ美術館)に始まり、アンドレアの工房と関わったロツォ・フィオレンティーノ、ポントルモ、そしてポントルモの弟子ブロンズイーノによるキリストの死を扱った三大傑作が一堂に会する。さらに盛期マニエーラを代表するサルヴィアーティ、ヴァザーリの祭壇画と、チェッリーニの彫像が続く。18世紀起源の「マニエリスム」の呼称を用いず、16世紀当時のタームである「マニエーラ・モデルナ」(現代様式)を使用するのは1996年の「マニエーラの工房」展(フィレンツェ、ウフィツィ美術館)以来のナターリの自覚的主張である<sup>3</sup>。

続くセクションは対抗宗教改革期の祭壇画に捧げられ、アレッサンドロ・アッローリ、サンティ・ディ・ティート、ピエトロ・カンディドの作品が展示される。肖像画のセクションでは珍しい個人像作品が目を惹く。特にマーツ・ダ・サン・フリアーノ《シニバルド・ガッディ》は幼児のモデルが黒人の小姓に抱かれ、カヴァローリ《友情の寓意を伴う若者》はPROCVL PROPE(遠くにあっても近くにあっても)と銘文の記された赤い心臓を指さすといった珍しい構図による。サンティ・ディ・ティート《ガイド・グアルディと子息たち》は初出で、スポーディング以降いまだ本格的なカタログのないこの画家の肖像画の作品体系構築に寄与するだろう。

「フランチェスコ一世のストゥディオーロ」に参加した画家・彫刻家たちのセクションでは、六名の画家が一点ずつ制作した半円形の寓意画連作六点(うち五点が初出)が貴重極まりないが、これについては後述する。

世俗主題のセクションでは、アンマンナーティ《ヘラクレスとアンタイオス》(フィレンツェ北西ペトラリア、メディチ家別荘)とジャンボローニャ《ウエヌス／フィオレンツァ》(フィ

レンツェ北西カステッロ、メディチ家別荘) という、それぞれトリーポロの《迷宫の噴水》と《大噴水》の頂部に置くために制作されたブロンズ像の傑作が、修復を終えて間近に見ることができる。

最後に 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての美術を扱ったセクションでは、前出のサンティ・ディ・ティート、アッローリらと並んで、グレゴリオ・パガーニ、チーゴリ、アンドレア・ボスコリ、エンポリら 17 世紀フィレンツェを彩る画家たちと、カッチーニ、ピエトロ・ベルニーニら彫刻家たちの作品が並ぶ。ピエトロはバロックの巨匠ジャンロレンツォの父だが、フィレンツェ北西のセスト・フィオレンティーノ出身だ。ナポリ生まれの巨匠ベルニーニがローマで活躍しながらもフィレンツェの血を引く事実を忘れてはならない。

本展で特筆に値するのは、1545 年にフランスに送られて以来、約 470 年ぶりにフィレンツェに里帰りしたブロンズイーノ《キリスト哀悼》(ブザンソン、美術館) (図 3) が、ロッソ《十字架降下》(ヴォルテッラ、市立絵画館)、ポントルモ《墓に運ばれるキリスト》(フィレンツェ、サンタ・フェリチタ聖堂) と同じ光の下で比較しながら鑑賞できることである。この点ひとつとっても本展を訪れる価値は十分だろう。同作品はフィレンツェ政庁舎(パラッツォ・ヴェッキオ)のトスカーナ大公妃エレオノーラ・ディ・トレドの礼拝堂の主祭壇画として制作されたブロンズイーノ全盛期の傑作だが、程なくフィレンツェ公コジモ一世により、ブザンソン出身で神聖ローマ皇帝カール五世の秘書官を務めたニコラ・ペレノーに寄贈され、八年後に画家自身が再制作したレプリカが代わりに祭壇に据えられた。現在も同礼拝堂にあるその作品は元の作品と同一構図だが、原作の輝かしい色彩美とは較ぶべくもない。かつてブザンソンを訪れた際に修復中で実見の叶わなかった《キリスト哀悼》を、師ポントルモらの傑作の傍らで鑑賞できたことは、評者にとりことのほか贅沢な時間となった。

もうひとつ、上述した寓意画六点は評者にとり個人的に最も興味深かった。サンティ・ディ・ティート、ピエトロ・カンディド、ポッピ、ジョヴァンニ・バルドゥッチ、ジョヴァン・マリア・ブッテリ、ロレンツォ・デッロ・ショリーナといったストゥディオオーロ時代を代表する画家たちの精緻な半円画(ピエトロ・カンディド以外は初出)は、委嘱主こそ未特定だが、主題や寸法上のわずかな不均衡は、現存する六点以外にも連作に属する未発見の作品の存在を推測させる。唯一ストゥディオオーロに参加していないピエトロ・カンディドが 1586 年にフィレンツェを去っていることなどから、本連作はおおよそ 1582-85 年頃に年代設定された。評者はかつて肖像画以外のサンティ・ディ・ティートの全作品カタログ(2005 年)を作成したが<sup>4</sup>、その後ファルチャーニからこの個人蔵連作の写真を見せられたことがある。そのときの連作の全貌がようやく明らかになったことは個人的にも喜ばしい。

サンティ・ディ・ティートの半円画は、円柱の礎石の前に坐る一人の女性が、頭に羽のついたロバの皮を被り、心臓の上に左手を置き、右手で鳥の前足二本をもつ珍しい構図(図 4)で、バッチョ・バルディーニ『異教神の系譜の仮装行列に関する論考』(フィレンツェ、1565 年刊)とチェーザレ・リーパ『イコノロジーア』(ローマ、1593 年初版)の記載により《労苦》の寓

意と解説された<sup>5</sup>。

本展覧会は監修者ナターリとファルチャーニの共通の師であり本展の直前に亡くなった、カルロ・デル・ブラーヴォに捧げられた。デル・ブラーヴォは2008年秋にフィレンツェ大学を退官後、病と戦いながら精力的に論文発表とARTISTA誌編集に携わってきたが、2017年2月より入退院を繰り返し、8月12日にフィレンツェ北西のカレッジの病院で逝去した。15世紀から今世紀に至るイタリア美術に独創的な解釈を試みてきたデル・ブラーヴォの論考については本誌上で紹介を続けているので参照されたい。特に本展出品のフィレンツェ16世紀の美術家については、ミケランジェロ、アンドレア・デル・サルト、ポントルモ、ロッソ・フィオレンティーノ、ブロンズイーノ、チェッリーニ、ヴァザーリ、アンドレア・ボスコリについての研究があり<sup>6</sup>、本展には出品されていないがロッソの《洗礼者ヨハネ》の所有者でもある。この師の指導の下、ナターリはミケロット研究により、ファルチャーニはロッソ・フィオレンティーノ研究により学位を得た<sup>7</sup>。その後ナターリはウフィツィ美術館16世紀部門主任研究員を経て同館長として敏腕を振るい、古代美術の参照と図像解釈を駆使して多くの作品の調査に当たってきた。またファルチャーニは現在フィレンツェの国立美術大学（アカデミア）で教鞭を執っている。本展が、両者にとり出発点であり不可避の参照点でもあった師に捧げられていることは意義深いと言うべきであろう。

## 註

<sup>1</sup> *Bronzino. Pittore e poeta alla corte dei Medici*, cat. della mostra (Firenze, Palazzo Strozzi), a cura di C. Falciani e A. Natali, Firenze 2010.

<sup>2</sup> *Pontorno e Rosso Fiorentino. Divergenti vie della "maniera"*, cat. della mostra (Firenze, Palazzo Strozzi), a cura di C. Falciani e A. Natali, Firenze 2014; 甲斐教行「パッチョ・バンディネリ展／ポントルモとロッソ・フィオレンティーノ展」、『五浦論叢』（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）、21号、2014年、pp.(23)-(33)。

<sup>3</sup> A. Natali, *Segnavia preliminari*, in *L'Officina della maniera. Varietà e fiera nell'arte fiorentina del Cinquecento fra le due repubbliche 1494-1530*, cat. della mostra (Firenze, Galleria degli Uffizi), Venezia 1996, p.4; 甲斐教行「近年の『マニエリスム』研究の動向——ポントルモとロッソ・フィオレンティーノを中心に」、『日伊文化研究』、36号、1998年、p.115。

<sup>4</sup> 甲斐教行「サンティ・ディ・ティートの絵画研究—ドメニコ会思想に基づく図像解釈の試み—」（平成13～16年度科学研究費補助金〔基盤研究C2〕研究成果報告書）、茨城大学、2005年。

<sup>5</sup> B. Baldini, *Discorso sopra la Mascherata della Genealogia degl'Iddei de' Gentili*, Firenze 1565, p.17; C. Ripa, *Iconologia*, Roma 1603, p.145; C. Falciani, in *Il Cinquecento a Firenze – "Maniera moderna" e Controriforma*, cat. della mostra (Firenze, Palazzo Strozzi, 2017-2018), a cura di C. Falciani e A. Natali, Firenze 2017, p.232。

<sup>6</sup> ミケランジェロに関する論文は、『五浦論叢』13号、2006年、pp.115-157; 14号、2007年、pp.111-148; 15号、2008年、pp.131-186; 18号、2011年、pp.101-135; 19号、2012年、pp.153-193; 20号、2013年、pp.99-111, 113-126に掲載（C・デル・ブラーヴォ『ミケランジェロ研究』、甲斐教行訳、中央公論美術出版、2018年に所収）。その他の論文は、C. Del Bravo, *Andrea del Sarto* (1995), in Idem, *Bellezza e pensiero*, Firenze 1997, pp.109-123; Idem, *Dal Pontorno al Bronzino* (1985), in *Bellezza cit.*, pp.131-138（C・デル・ブラーヴォ「ポントルモからブロンズイーノへ」、『美の顕現—ルネサンスの美術と思想』、甲斐教行訳、中央公論美術出版、2016年、pp.171-190）; Idem, *Pensieri e sentimenti del Rosso Fiorentino*, "Artista", 2010, pp.90-103; Idem, *Di Giorgio Vasari, Sacre Famiglie come allegorie*, "Artista", 2008, pp.108-115; Idem, *Per il Cellini*, in *Bellezza cit.*, pp.145-154; Idem, *Andrea Boscoli: fra ironia e contemplazione* (2003), in Idem, *Intese sull'arte*, Firenze 2008, pp.245-248。

<sup>7</sup> A. Natali, *L'umanesimo di Michelozzo*, Firenze 1980; (2 ed., Firenze 1996); C. Falciani, *Il Rosso Fiorentino*, Firenze 1996.

(2018年3月30日受理)

[かい のりゆき / 所員・本学教育学部教授]



(図1) アントニオ・ナターリ (左) とカルロ・ファルチャーニ (右)  
「フィレンツェの16世紀」展オープニングにて



(図2) カルロ・ファルチャーニ「フィレンツェの16世紀」展オープニングにて



(図3) アーニョロ・ブロンズイーノ《キリスト哀悼》、ブザンソン、美術館



(図4) サンティ・ディ・ティート《労苦》、個人蔵